



拡大・発展への道

小金井の地に再建

工学部創立十周年

充実から拡大へ

計測・管理両学科の増設



小金井の
メインストリート

小金井の地に再建

谷村学部長から宗宮学部長へ。すべてが「無」からの再出発である。如何なる困難があっても、それを乗り越えて行かなければならない。一種の気魄に満ちたエネルギー

ギーが混乱の中から收拾に駆り立てて行ったと言えるかも知れない。校舎の選定と申請、移転、器具・機材の整備、教職員の確保等々、問題は山積していた。しかも三田では、工学部廃止論が話題に出ることすらあった。漸く溝口で正規の授業が開始された。しかし、これがはたして大学の工学部と言えるだろうか。一日も早く、真の大学の姿を取り戻さなければならない。昭和二十二年五月慶應義塾創立九十周年記念祭が開催され、全塾員一致協力して復興への第一歩を踏み出した時、工学部再建の声が塾の内外に高まった。その頃宗宮学部長は病氣静養のためその職を辞し、藤岡忠仁教授が事務取扱として学部長の職を代行していた。再建工学部長の決定が急務であった。塾長潮田江次が元東大工学部長丹羽重光博士を訪問して工学部長就任方を懇請し、同年八月一日付をもって丹羽学部長の就任となる。いよいよ工学部の再建が始まった。大学として不適當な溝口仮校舎からの撤収が

先決問題であり、新用地の設定を急ぎ、さらに人的および物的の整備、研究と教育に対する意識の高揚が再建のための当面の課題であった。

新学部長の就任後間もなく、学部開設以来講師として応用物理学を担当していた真島正市が十月初め教授に就任し、続いて十一月末には元九州大学教授栖原豊太郎が機械工学科の教授に迎えられた。また翌二十三年五月初め東京芝浦電気の一色貞三が電気工学科の講師に就任するなど、学部の教授陣は次第に整備されていった。かく



丹羽重光学部長

して研究と教育の推進力の充実に充分期待できるようになったのであるが、昭和二十四年度からの新制大学移

行問題とも関連して工学部では新制の大学設備基準による所定の設備——研究室実験室および実習室の設備と図書館を整備する必要に迫られ、新しい用地の獲得を急ぐことになった。いろいろ物色し



小金井校舎正門——工学部の歴史の三分の二、23年間をここで過ごした。

た結果、昭和二十三年四月、横河電機製作所小金井工場の買取契約が成立し、校舎として使用できるよう建物の改修工事に着手。各科に振り当てられた建物のうち、破損が余りにもひどく改修のおくれた応用化学科を除き、第一期改修工事は二十四年三月に完了。三月一日より移転開始。重量物は運送会社に依頼したが、大半の荷物は

七期・八期の学生たちにより旧陸軍から払下げを受けた自動車工学研究会の車を利用して運ばれた。特に天秤のような破損しやすいものは、一人ひとりの学生の腕にかえられて運ばれた。移転は予定通り二週間で完了し、この間六期生は溝口での最後の卒業生として学窓を去って行った。

昭和二十四年四月十九日、小金井新校舎において始業式挙行。翌二十日より授業開始。かくて工学部は再建され、その後二十三年間にわたって、全歴史の三分の二をこの地で過ごすことになるのである。

工学部創立十周年

改装成ったとはいっても、戦時工場を応急に改造しただけのことから、この新しい環境でまず第一に落ち着いて研究のできる雰囲気をつくるのが先決であった。戦



水曜日の輪講会

小金井初期の頃で、学問への姿勢を正すと共に研究体制を積極的に作り出し、同時に相互間の親睦にも役立った。写真は応化教員の物理化学を中心とした輪講。左より林喜男、久野洋、日比野真一、永井隆

災後の空虚な気持ちに終止符をうち大学本来の使命に一日も早く戻ることが大切であった。このために、丹羽学部長の積極的な方針が次々に打ち出されていった。

昭和二十四年十一月十二日、工学部創立十周年記念式が機械工学科の製図室を式場として挙行された。学内諸施設を公開し、記念講演会や研究発表会、運動会等が開催され、学生による各種の催しもあり、また工学部同窓会が結成されて母校に藤原の胸像を贈ることになった。



この時丹羽学部長は、「慶應工学部が十年後も、このままの状態で小金井に留るならば、工学部はつぶした方がよい」と語っているが、その主旨は、建物の耐久限度も長いものではないが、それよりも、総合大学の一翼を担う工学部が、発展もせず

孤立した状態で停頓してはならない、ということを意味し、式典に参加した人々の胸に新たな決意を与えたのであった。

当時工学部文連の初代委員長で記念祭の実行委員をしていた応用化学科八期小山和則の述懐するところによれば、学生側としては、小金井における最初の記念祭であり、出来るだけ盛大なものにしたかった。しかし学校当局から与えられた僅かな金額（七千円の予算だったという）ではどうにもならない。学部長に予算の増額を申し出た。この時丹羽は、「君等の言うことはよく分る。しかし自分は、この十周年祭は工学部のお葬式だと思っている。大赤字を出している工学部は、三田からみれば慶應義塾の足を引っ張っている形で、もし工学部がなくなれば、三田の教授の給料も今よりずっとましになり、設備もよくすることが出来るだろう。この際工学部を切り捨ててはどうか、などという主張も出ているほどだ。われ

われ工学部の人間として、今は非常に苦しい立場におか
れている。漸く小金井に落着くことが出来たけれども、
これからの工学部再建は大変な仕事になるだろう。われ
われは、今ここで、この十周年の行事をやって、これま
での暗い歴史にさよならをしたい。これが記念祭の意味
だと考える。予算はこれ以上あげられないが、地味な記
念祭でもいいではないか。そして、これを踏台にして再
出発をしようではないか」と苦衷を語り、委員たちも
「地味な記念祭を立派にやってお目にかけます」と答え
たという。

小金井初期はすべてが不自由な生活環境にあった。熱
源として都市ガスが全く利用できず、実験は長い間電力
に頼っていた。少ない経常費は費用の節約につながり、
溝口から運んだ机・椅子・実験机・事務機の老朽したもの
を手直ししながら使用し、また機械工学科の学生たち
はみずからの手で製図机や作業椅子を製作したりした。

「学生みずからの手で」というのが、当時の合言葉であ
った。グラウンド作りも、学生たちがローラーを自作し
たり、工事場から借りて来て地均らしをやった。学部長
みずから陣頭に立って工事の指揮をとり、学生たちも負
けずに頑張りを通して、完成したのであった。「ハンチン
グをかぶって指揮していた老学部長の姿が今でも眼に浮
かぶ」と、当時の工学部体育会の自治委員、応用化学科
八期近藤信一は述懐している。

新制大学は教養課程二年、専門課程二年が原則。丹羽
学部長はこの制度に強く反対し、工学部では教養を一年
として、これを接収解除になった日吉に戻し、専門課程
三年間の授業を小金井で行なう体制が確立されたのであ
る。新校舎に落着き、新体制で再出発することになった
が、多くの難問題をかかえた工学部はその後もお暫ら
く暗い谷間にあった。わが国工業の壊滅とともに、終戦
後工科系大学の入学志願者が一時大幅に減少したことは



復活の駅伝

戦争で中止になっていた工大名物の駅伝が復活したのもこの頃。三田
の図書館前から小金井までを7区間に分けて、2人1組・各クラス総員
14名で走った。当時は対面交通・右側通行の制度が採用された直後で、
マラソンの場合はどうなるのか。小金井署では出発地の警察
で聞けというので、実行委員が三田署に向いた。新しい交通規則の施
行で、どう扱ってよいか。結局「マラソンは速いから左側を走れ」とい
うのが警察の指図だった。この駅伝は、交通事情で実施不可能となるま
で、その後数年続けられた。

むしろ全国的な現象でもあった。もっともみじめな状態
にあった工学部の入学競争率は、当時塾内でも最低の線
に落ち込んでいた。この入学競争率が急速に高くなり出
したのは昭和三十年頃からであるが、これは、日本の復
興と共に工学部の復興も大いに進んだことを意味する。

充実から拡大へ

計測・管理両学科の増設

工学部の基礎もようやく固まった頃、昭和二十二年八
月就任以来六か年間にわたって再建・復興に尽力した丹
羽学部長が、工学部の来たるべき拡充と発展を後輩に託
して小金井のキャンパスを去ったのは、昭和二十八年九
月であった。新制大学院の修士課程が既に昭和二十六年
四月に発足しており、また同博士課程も二年後の、この



小金井初期の図書館

まだ図書室とよばれていた頃の学生閲覧室

年四月に開設された。日本の国際社会への復帰、朝鮮戦争後の日本経済の復興に伴って、科学技術者の不足を緩和するため理工系学生の増員が強く要望されるようになり、工学部においても学生の増員計画が論議され始めた。学生増員の方向は、一つは既設三学科の学生数を増すことであり、もう一つは新学科の増設である。工学部の拡大も当然この二つを含むものであり、同時に研究・教育の施設の増加、教授陣の強化が行なわれることを意味する。かくして大学院を拡充し学内研究者を養成するために、東北大学名誉教授抜山平一が客員教授として迎えられたのもこの頃。拡大の内容を具体的に学生数で見ると昭和三十一年には第一学年の学生数約二百五十名程度であったものが、三十八年四月の新入生約六百名と、実に倍以上の増加を示したのである。

昭和三十年前後から工学部の内容は著しく充実され、規模も次第に拡大されて行った。この場合、理科設備、

研究設備など文部省の理工系大学に対する補助金が工学

部の充実拡大計画にとって実に大きな側面的援助となっていることも見逃がせない。ドイツのアーヘン工科大学との間に交換学生制度ができたのは昭和三十一年。工学部近傍の北海道炭礦汽船株式会社所有地約二千坪が、同社長・塾員萩原吉太郎の好意により義塾に寄贈されたのは昭和三十二年。工学部の第二用地がこれである。

小金井における拡大計画として、計測工学科と管理工学科の二つの学科が増設された。いずれも新しい学問分野に属する。戦後オートメーションの発達に伴って、弱電技術と応用物理学とを中心とした計測技術の必要性が強調されるようになった。この時代的要請をふまえて工学部では、既に昭和三十年四月計測工学専修コースを設けていたのであるが、当時の学部長真島正市が中心になって、この専修コースをさらに拡大・充実し、一つの学科に昇格させたのが、昭和三十二年四月発足の計測工

学科である。

次に東京大学教授山内二郎を招聘して、全く新しい性格と内容を持った工業経営関係の新学科が、府中市にある隣接の第二用地に設立された。昭和三十四年四月に正式発足。戦後における電子計算機械の発達による経営管理の急速な近代化に伴って、従来とは全く異なったタイプの



小金井初期の学生生活

技術者が強く要求されるようになった。技術者は、工場
 の実際の場において働きながら、しかも広い経営的な見
 通しも持たなければならぬ。総合的な視野に立つ学問
 体系をつくり、これを身につけた管理技術者を養成する
 ためには、どうしても新しい学科の設立が必要となる。
 こうして、わが国では初めての管理工学科という新しい
 名称を持った学科が創造されたのである。教育のスタッ
 フも工学・理学・経済学・商学・医学・文学の各分野の
 出身者が集まり、協力して共通の広場をつくり上げる努
 力を重ねている訳であるが、工学でも経営でもないとい
 った中途半端な存在になってしまわないよう、十分な配
 慮が当然払われている。

昭和三十四年六月十四日、工学部創立二十周年記念式
 が三田の西校舎講堂で挙行された。さらに六月十七日に
 は、記念講演会ならびに工学部学生による祝賀会が産経
 ホールで催された。なお十四日の記念式に引続いて「慶

應工学会」の発会式が行なわれた。これは、工学部と産
 業界との協力関係を緊密にし、両者の発展を期すること
 を目的として設立されたものである。翌三十五年、工学
 部の教育・研究活動を合理化し旺盛にする目的で、中央
 試験所が設立された。試験所の設備はその後次第に強化
 され、計算機研究室・赤外線研究室・X線研究室・高電
 圧研究室・低温研究室・太陽炉研究室・アイソトープ研
 究室および硝子細工室から成っている。

昭和三十九年六月十七日、工学部は創立二十五周年を
 迎えたが、これ以上の充実と拡大は小金井のキャンパス
 においては極めて困難であるとの判断が下された。これ
 より先、昭和三十年の秋、元学部長宗宮が再び選出され
 た頃、義塾創立百年記念事業として立案された建設復興
 計画の中に、工学部関係の建設がもれていたので、工学
 部では大いに不満とし、工学部独自の委員会を編成して
 義塾当局と交渉に入った。宗宮は塾長、理事と数次の折

研究室公開 (No.1)				研究室公開 (No.2)			
種別 番号	研究題目	研究者	学科	種別 番号	研究題目	研究者	学科
54	溶媒の電気伝導力試験	松原豊太郎	機械	17	有機化学研究室	梅沢 純夫	応化
52	繊維物の膨張測定	木下 光博	-	-	-	木下 光博	-
46	自動機試験台	西村 一郎	-	-	-	藤井 大祐	-
9	ガス・ブレンディン	-	-	-	-	武井 武	-
51	内燃機燃焼制御装置	-	-	-	-	吉田 哲郎	-
11	冷凍機	行下 邦雄	-	43	有機化学研究室	木井 隆	-
34	太陽熱利用装置	-	-	-	-	木村 健之	-
34	高圧研究室	-	-	17	分析化学研究室	梅沢 純夫	-
9	工作用高圧機械装置	池田 栄	-	43	化学工学研究室	梅沢 純夫	-
14	特種測定器表示	-	-	17	物化学研究室	梅沢 純夫	-
-	材料力学実験機表示	水野 正夫	-	-	-	梅沢 純夫	-
19	高圧圧縮機	森 元吉	電気	-	-	梅沢 純夫	-
-	高圧圧縮機の制御	森 元吉	-	-	-	梅沢 純夫	-
-	電子回路制御	森 元吉	-	-	-	梅沢 純夫	-
22	電子回路制御	森 元吉	-	-	-	梅沢 純夫	-
-	電気計測装置	森 元吉	-	3	有機化学研究室	梅沢 純夫	-
-	高圧測定装置	森 元吉	-	-	-	梅沢 純夫	-
-	高圧測定装置	森 元吉	-	-	-	梅沢 純夫	-
38	電気工学実験機三動機表示	藤井 武夫	-	-	-	藤井 武夫	-
-	電気機械制御装置	-	-	15	有機化学研究室	藤井 武夫	-
-	自動制御装置	-	-	-	-	藤井 武夫	-
-	制御材料制御装置	-	-	-	-	藤井 武夫	-
33	トランスミットラ	大野 弘	-	-	-	大野 弘	-
32	船舶用通信機	藤田 広一	-	3	学生実験用装置表示	藤田 広一	-

慶應義塾創立百年記念祭における工学部の研究室公開

衝を重ねた結果、今後五か年ぐらいは現在地において内
 容の充実をはかり、十年後には日吉に移転して大工学部
 の実現を期するという、暫定的な協約を得ることが出来
 た。今や工学部にとって日吉復帰が最大の関心事となっ
 た。そして昭和四十三年五月慶應義塾評議員会において
 工学部日吉復帰計画が正式に承認されたのであった。

戦争の痛手を最も深刻にうけた学園として塾全体の復
 興という立場から、工学部の日吉復帰は結局最後まで延
 ばされたのであったが、ついに待ち望んだ日が来た。復
 帰再建計画の第一期工事として、まず日吉台に第六およ
 び第七校舎が四十四年末から四十五年春にかけて完成し
 た。第六校舎は教室棟、第七校舎は実験棟。いずれも一
 ・二年の一般・基礎教育部門の施設である。さらに再建
 計画の第二期工事として、最近日吉の矢上台上に、三・四
 年の専門課程および大学院関係の施設が完成した。そし
 て昭和四十七年二月小金井地区よりの撤収が完了した。